26 国　　境

国境とは何かと聞かれて、的確な答えを出せる人は、ほとんどいないのではないだろうか。「国の境」では、いいかえただけで、答えにならない。国とはなにかという、むずかしい問題に踏み込むと、泥沼にはまってしまう。

生まれてはじめて、アイルランド共和国と北アイルランドとの国境を越えたとき、国境とはこんな程度のものかと、新鮮な驚きを感じた。車の窓からパスポートを見せるだけで、別に何の手続きも必要なかった。まだこの先に何か特別な検問があるのだろうかと思っているうちに、もう国境を過ぎていた。それよりもむしろ、北アイルランドのベルファストの市内の緊張のほうが、紛争の渦中のきびしいものを感じさせた。

イギリスの正式の名称は、「グレートブリテンおよび北アイルランド連合王国」であるが、グレートブリテンはイングランド、スコットランド、ウェールズで構成され、さらにマン島や海峡諸島などのもイギリス王室に属する。スコットランドやウェールズおよび北アイルランドには、それぞれ独自の言葉があり、使える人の数は多くはないとはいえ、いちおう公用語のひとつになっている。さらにスコットランドには、独自の紙幣まである。その他の島になると、事態はいっそう複雑だ。フランスに近い海峡諸島には、独自の法律があり、交通法規も異なっているらしい。イギリスは今なお植民地をもっているが、そうなってくると、本国と植民地の違いも、それほど絶対的ではない。結局、国の境というのは、かなり便宜的なものといわざるをえないのだろう。

ヨーロッパの人たちにとって、近くの国々を訪ねることは、ほとんど国内旅行感覚だ。イギリスからパリへの日帰りショッピング・ツアーなど、ものすごい格安料金のものがある。あまりに手軽すぎて、ついついパスポートをもっていくのを忘れる人があるらしい。先日は、お年寄りが、ヨーロッパのある国にパスポートをもたずに行ってしまい、何かの都合でそれがばれて、一晩収監されてしまったが、そんな微罪でお年寄りを一晩収監するとはあんまりだと、イギリス政府が抗議していた。

そうしたヨーロッパの国々も、今は統合に向かって、着々と準備が進んでいる。さしあたっての山場は、1999 年に予定されている、通貨統合だ。そのた

めには、各国がまず累積債務を解消しておかなければならない。いっしょになる前に、まず借金だけは返してきれいな身になっておこうということだろう。新しい通貨の名前は、ユーロ。統合されてしまうと、あの紙幣はやたらゼロが多く、硬貨にはとてもさわって読めるとは思えない小さな点字が刻まれているイタリアのお金も、なくなってしまうのかと思うと少しさびしいが、物資の流通はいっそう促進され、きっと経済は活性化するだろう。「ユナイテッド・ステイツ・オブ・ヨーロッパ」の誕生が、いっそう近づくのである。

ヨーロッパ統合のプロセスは、いつの日か、世界が統合される時のシミュレーションのようなものかもしれない。そのためには、それぞれの国の格差が、今より縮まっていなければならないだろう。パイを奪い合うよりも、分け合うほうがパイが大きくなることを、だれもが理解できるような環境も、前提条件だ。それが、いつのことであるのかは、まったく予想できない。何世紀も先のことであるのか、案外早くやってくるのか。新しく誕生するヨーロッパが、これまでの強大国の歩んだ道をくり返すのか、それとも、まったく新しい事態が展開するのか。ただ、ヨーロッパ・ナショナリズムとでも呼べるような風潮が、かすかではあるが生まれてきているように感じるのは、不安な要素である。

1996　新納泉　　著作権フリー

【付記】EU 発足直前の雰囲気を記したこのエッセーは、それなりに意味があると思う。そして、2020 年にイギリスは EU から離脱した。「何世紀も先のことであるのか、案外早くやってくるのか」と書いているが、EU は案外早くやってきて、意外に早く離脱という道をイギリスは選択した。また、近い将来、大きな変化があるのかもしれない。